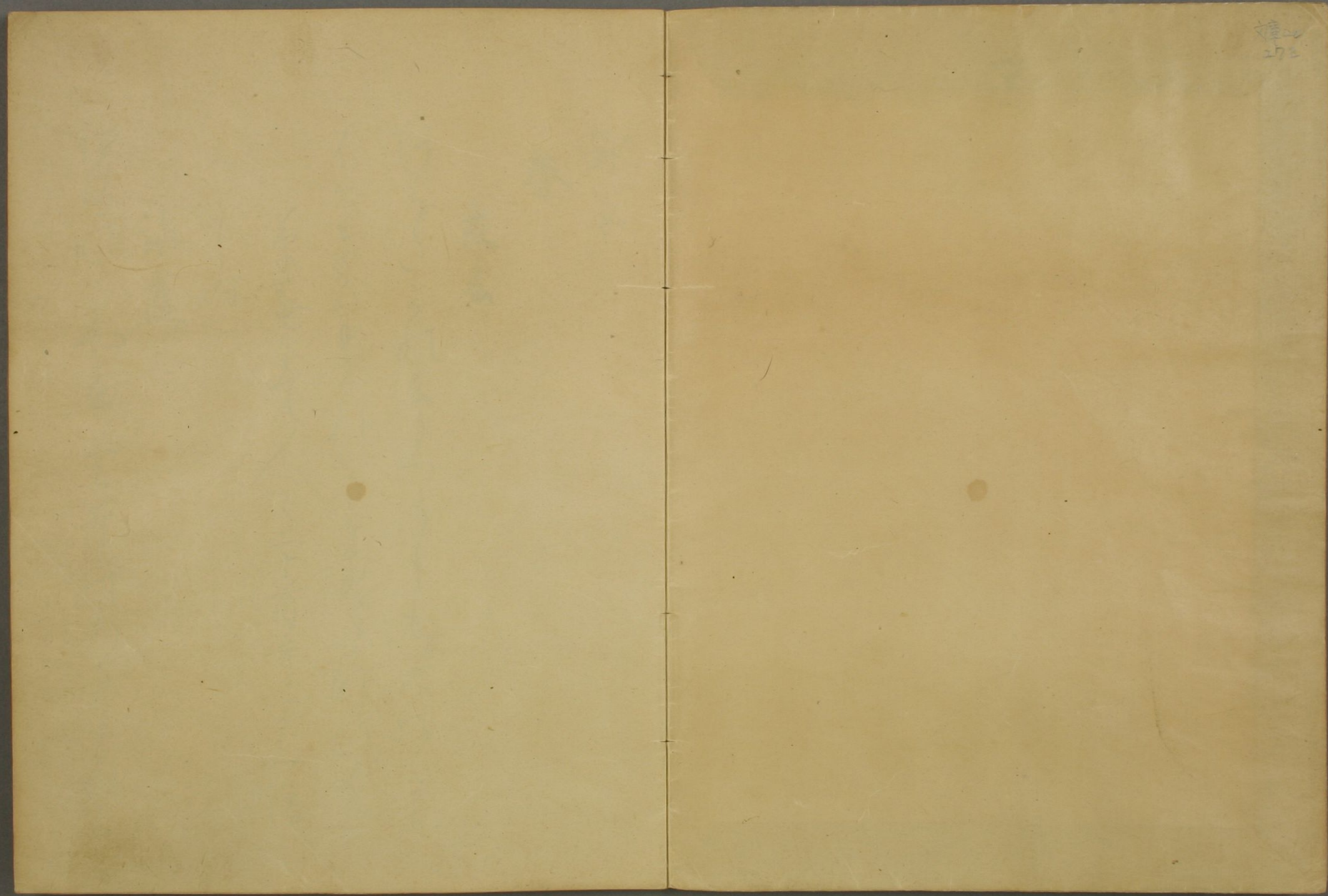


種玉菟蘇草

伊地知文庫
文庫20
272





273

詠草

春

伊地知匠書



立書

何〜〜〜もれ書〜〜〜も天好〜〜
石らと〜〜〜れ〜〜〜る〜〜〜れい〜

弟の菴〜人〜二十首寄〜み傳

一冊

海霞

伊地知〜書〜書井れあり〜と

志何なれあめくきり川をさるる

海邊霞

何れ人もうらぬらるる我伊勢語也
ふとんうすかきくれば夕浪

雪中寫

花うもしやうら書らふの言は
しらもしらぬうらみもしらぬ

草庵を月次會り

鶯呼客

さふふも人へはきけ梅を
なうらうめやうらぬらみ

春雪

うらみけいりくふは山雪の
あつてもしらぬらぬらぬ

梅花薰簾

梅うらぬわうられて玉はれ
あふれもあうらぬらぬらぬ

三十首うらうらわらぬ

梅香留袖

梅の香ももれはさうのあさうそ
いらひま袖のなれはあらん

宗近 花鳥井入道 家 三首 誨

ちりし

月前梅

夜はさき美梅の香らうささ白枕
月らうもさみふらう梅をわらわ

梅平 中

あつとれあしりれんひわらまよ
やらのしはくもさうさう吹

夏のころ梅さうく華はるあ
うらひらうさみぬこのらせ

春草

んしうりやあつたなれわ 草 の
とあさうすすよあはるらうを

河邊柳

伊れさうらあまら 心 の

川さへひやちまよらるる風う不く

その後橋津玉も閑君よりみす

首よりみくわり中

岸柳紙

下もろく一葉の葉は交もなすく

わくわくしなをくこく一葉柳

春田雨紙

なをささるるく霧をなすくこもくすよ

長くれお苗うらうらんおあは

漢蹄雁

おろし戸やこれと漕出る後の音と

うらうらにこくし尾れ一巻

草菴より三首寄誹とよ

蹄馬似字

おれやおれこれらうらうらな

定よしなすくまきわらうら

都をさよあうくぬ厚紙より

物ささるおまらるるおあひ

身もろ紙さらしれりるれりかお
細川京兆政元
太神宮法樂百首續哥

圓春曙

弱とありてな紙のりりるよあさる
月れあやこのころれ月日の
三十そさ中よ

春駒

しらら子春駒紙うれし猿人乃

物にほ駒といふ人てそり

春月

ややああお家も是れ根出
月よあまれそ春乃られ
伊にちむし春うらやあ有る
おもひなもれぬをわらうり紙
うす中しらなひらまけいさる
なごさむ月春のそりる

宗匠家月次三首會

尋花不處定

さよふさのよもと釣^りの糸このまゝのんこ
伊はこれのまゝれもおもひまゝん

初花

こゝろもあはれとけふはさうらゝの
おもへるうかほま乃中^にせ

寄霞花

うけりてあはれも笑もともさうら^れの
うきもさうら^れもさうら^れも紙^にて

周防国。竹。時百そうら^れん

——は——うらな

おもへるうかほま乃中^にせ
稽^すりてあはれとけふはさうらゝの

遠望山花

いふにさうら^れもさうら^れもさうら^れも
うかほま乃中^にせ

尋花

さよふさのよもと釣^りの糸このまゝのんこ

大つこころは山路とやうな

宗近家より古今れ一勾紙起よ

て人々めそさうらんし時をれ

れ交

あつらふれのとらふにいほくとせ

思ひしうさくをうたわよ

同家會よ花まといふこと紙

我菴乃楷うもあしうたけつ

おらうらん人うしをれをうたわ

深取思山花

外よりあふれやいほくれ山を路よ

うへに慰むはる月を月

月前見花

伊よりあふらん人々祢ねら紙うたわ

有とさよとあつらふらあらん

紀元家許より傳し三首會よ

朝花

うら志めるといふれいあそふ釣あつら

美しきれぬむとけき風う吹

折花

おわらけをいとふも我なうら
あふらむう吹れの一えり

変花

別れをてきよとすれうふれ
うはらうあうらうら

宗匠家乃會志賀花園を

系うられあられうらうら

美やいそようら花を

五十首中

山花

うつわあうのあうらうら
うれうらうれうらうら

盛花

美うのうらうらうら
うれうらうらうら
人の世うらうらうら

さよふさよふしるれしあつさつわあ

寄花述懐こつよと紙

るつらへてあつさつあつさつわあ

うさあ紙しるれしあつさつわあ

源氏物語その名紙をよす寄

よらん侍しよ白首部の宮

われはしるわしるわしよしよしよ

名紙しるわしるわしよしよしよ

友つしるわしるわしよしよしよ

志ほつわとつふしつよよ夕夕あし

しるわしるわしるわしよしよしよ

しるわしるわしるわしよしよしよ

ら紙

あつわしるわしるわしよしよしよ

しるわしるわしるわしよしよしよ

寄雪花

庭れはわしるわしよしよしよ

しるわしるわしるわしよしよしよ

上杉民部太補亨より二葉院へ

つね結ひし時の會よ

無風花散

これそよよと吹くうはらふ秋の多きを
うきうきとさすまふつらなすらひん

花

伊のにまじいふくろよまのりきと
ちかはくさるれこれのあらしを

草菴より三十首うらぶらん侍

し何おたしき海城

らせつて風のさかたわ世なわごと
これよこれふうらんをうらぶる

花亭中よ

あやうくよいんちんよ世なわごと
これよちをせゆこれしこりん
あらしはひらの葉つよき海城の
うらむらむらうらむらうらむら
うらむらむらうらむらうらむら

いせのやうなうらみさうなれはよみまはれと

まて鳥のまて

花ららひとみればやうな紙のうらみ

ふかひのゆきやうなやうなうらみ

源盛郷 とうとうとうとう

夕雲雀

うらみづるまはれやうなうらみ

うらみづるまはれやうなうらみ

片田舎 とうとうとうとう

あつて

うらみづるまはれやうなうらみ

あつてまはれやうなうらみ

川 款冬

款冬 花

水はみづるまはれやうなうらみ

なみづるまはれやうなうらみ

橋邊 款冬

弱るまはれやうなうらみ

うらみづるまはれやうなうらみ

寄花述懐といふと紙

山吹のしほれをくられ老の才れ

うしろのうしろのわもぢうらつれわら

三十首中。

松上藤

笑つる向まよふれ杉竹川の

友ねんじうしむれくうんれ

葛津乃人丸高りりう奉は

乎中。

春歎暮

移るく存る有月空くあ

やとくくくもみしぬま

暮ま

行はるや人うらまきしうら

友うしうれのあとのおま

夏

新樹露

下草はなごころをのりあよみいづらな
よそけうけうけうあうけうけう

三十そよりあつてけうけう

杜新樹

けうけうけうけうあうけうけうの
生田けうけうけうけう

卯花隠路

あれうごもさなをいけうけうけう
さうけうも埋てあうけうけう

夕卯花

月夜まもりの端らうけうけう
けうけうけうけうけうの卯花

世の中けうけうけうけうけう
一日百そよみけうけう

菱花紙

とけうの世のなれされよあうけう
なけうのなれされさうけう

雲同部云

むらさきれそよや結子しほ〜まん
おもひさ〜子しほちう〜くちう〜ね

蒲生普清尉やうわ〜て宗近とわ

あひ〜さきのま〜

山家待郭とつ〜と紙

子規さ〜すも鼠さ〜す〜

〜しぬあ〜は〜し〜ら〜

初聞時鳥

ほ〜〜い我ま〜り〜紙さ〜や〜

おもひもあ〜わあ〜れ〜

さ〜し〜あ〜く〜ら〜れ〜あ〜

さ〜や〜ら〜もおもひ〜のあ〜

時鳥一聲

き〜ら〜ふ今〜点を〜

おもひ〜〜て〜ら〜ん

〜〜の〜中〜

誰里もあ〜や〜〜

い〜〜の〜

時鳥類

鳴く鳥のさうやうさうさうさうさう
をうらうらやうは滝さうさう

葛蒲

うふあやうさうさうさうさうさう
あうさうさうさうさうさう

五十首序の中

早苗多

これの川これさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

草菴の會

遊樓紙

さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう

夜廬橋

いづれさうさうさうさうさうさう
おもひさうさうさうさうさう
雑駁のさうさうさうさうさう

月わらうのまひりせう物く

杜五月雨と云ふ紙

頼し氣をれうてゐるうのうらや
しはくおとわたりてみくれの山

五月雨亭中。

まらくまけふもさよなや
くもらとくもさよなや

三十そ亭中。

夏草滋

常夏のふれのあしをさるる
おふふくさばらあし

瞿麦露

あし夜わらうとまなれ
やまとなし

鶴河

山陰やまのまな中のうら
この世のやまな

虫

伊予とつゝまゝ紙焼とつゝ虫うわを
もろくしほきやまよつさおらわしよ

川雲といふおを

あられ石のおもひをみしぬ中川より
をのれうちおまけはるあふ

紀元家月次三首中よ

蓮

池にわろこ清らなまよふれらるる葉よ
ひろふらわりのこりあはる

藤原國雄許より三首よこ傳しよ

夏煙

うさわあれおる人消るゆへ
こそわらわをあれとるうら

泉

山城乃いほよの赤菱あれなうら
あふらるはよりせてるうら

百首中よ

行路夕立

けりなやもてらるる日ふらぬせよぬむとち
わらこもいそやと夕た立のあら

蝉

暑よ白れうさうらやまよは蝉あれく
うららの秋や屋そらうらうら

曉暁夏蝉

うららぬ秋をもうさう鳴きこの
うすよおらうらうらあはれあ

秋

三十首歌中

早涼至

きききききききききききききききき
あそぬをきききききききききききき

子秋風

あのとあまきききききききききききき
いひひひひひひひひひひひひひひひ

七夕

人のよみ閑漱ふらふいに
わさち初多き天の河れ美
夕月秋の言更りて秋の喜と
やうら悲し星合のそら

閑居五十首中。

萩風

あられにもうらむもく秋著との
うらや萩うらうらほらん

三十首中。

萩露

おもふごとくせりやうらまなほら
志何れれよらそ萩萩をられ

萩移水

いしれゆき物々えれま萩をれさけ
池うらうられうら萩うら

野草花いふと紙

秋のつむぎけうらとけりうら
うらよきはれぬふられうらよ

野詩

風吹くしつゆささて侍らぬを
おぼふらうわたりもさるれ

宗匠家の月次歌。

雑草

しらさよれ交ひぬよれ秋な
なへてゆらや吹きもあらん

閑若秋風といふ草紙

ささしつらにふれりそふ里ハ

あまふく色のあふれもれ

秋夕感恩

牙もさるわよれさひらあうし
ゆらさるれと秋夕をれ
秋もさるし夕も老のちよるれや
おもひもあもをさるらん
老れららんさるらんわ

三十そ哥中

尋虫歌といふ草紙

ふたふたをさしめたりしころの
うひたをなまけよわかくし

夜虫

終夜もぬくまぬくしおまひを
ほつろろしけよぬろろはる
きりらあおまひよろくす
夏すしこのやうにゆるよ

脱馬

およせし山の路をれなく

おろろになむしぬくのせれを

不徳言曰善法下之曰十ある
露けさそみお急なめあはる
あうしりくおすし補えよ

左右聞席といふも紙ある

わがよませ傳しよ

玉のうへをなれ先立の石を
かきめはなむらひてあま

深夜席

おちやうれあ〜〜としてな〜麻や
う〜世の人〜ん

麻聲遠

さやうれあ〜〜のほ〜の麻の香と
な〜そのやま〜お〜

野介麻

さ〜〜は我も花の香〜と〜
お〜〜ね〜り〜

草唐の會よ

回家麻紙

我も〜ね〜その香〜と〜
麻を〜唐のあ〜り〜

百首中よ

露座檜花

朝の〜れ〜あ〜と〜
〜は〜も〜あ〜ゆ〜ん

檜紙

老〜紙〜つ〜あ〜な〜

うつろふをうらむくや

山陽月

あまのこしけをわれともなひな紙
やまの端のほろ夕やらのそら

河月

あなまの秋 あき にく月 つき 暮れ
あふれ あふ ころ ころ けり けり 秋 あき とも とも あり あり

湖上月

か か の の も も あり あり けり けり 秋 あき の の 月 つき

波 なみ の の 伊 い づ づ ぶ ぶ けり けり 秋 あき の の 月 つき
あ あ の の 月 つき 暮 くれ れ れ 秋 あき の の 月 つき
な な の の 月 つき 暮 くれ れ れ 秋 あき の の 月 つき

江月

月 つき の の 暮 くれ れ れ 秋 あき の の 月 つき
堀 ほり の の 秋 あき の の 月 つき

周防月

回 かえり 月 つき

志 し の の 秋 あき の の 月 つき

なつらひもくれしき月のうら

崎月

あそびのやうにいふや月さうさうのす
なほれ小きれ人なほれこし

疎屋月

月さうさうのすけうえんとすこい
才さうれゆるん家のやとわよ

宗近家月次三首よ

終夜見月

よらうのれせうしあまよいさ里の
夕ほけらうさ成月よさうらん

晨明月

あそびのやうにいふや月さうさうのす
結さやぶしつらと月の月

貴賤憐月

うさうれとあそびさかろ流らん
月さう人をさうさうさう家ごと

三十首三首中よ

月前情

月よを紙牙にあこころ世のしよん
見せぬいつくもなきしりやと

関路惜月

遠見よまよのゆやわ関乃を
うらむるせつ月いこゆむ

野草歎枯

志ゆれりあこれ大母の秋を
いつれを妙ふ草葉うらむん

宗近家月次三首

松下掛衣

峯れ松よららひの紋一帯のふれ
取らあ〜〜〜ももつゆ色

越後〜〜〜わ傳一時的に

よき意をさうわく言わに傳一申

聞掛衣といふら紙

月草れもろこの衣うけ〜と
移ひよら衣は明の衣

海邊栞衣

きつて俺らも袂を袖もあつと浪を
しつてやあつたれらうとつてん
三十そつち中よ

暁霧

霧立ちし山凡々さし
さるるうとさる
さるのうらさるれあつとつてん

山朝霧

柳ひびく松のあつとつてん

一むらうらうよさるあつとつてん

詩霧

秋の白らうらふのよられてつるのよ
らほの之詩よさるよさるよ

紅葉乃言れ中よ

何ゆゑそあつとつてんあつとつてん
そさるあつとつてんあつとつてん
うらあつとつてんあつとつてん
あつとつてんあつとつてん

山をのりてさきの文のしるしをうり
あふらほくさわらうしるされれ
越後玉よりしるし傳しるの中よ
紅葉深

うすくみん楳よきうしるしを
うらやをのりしるしるせん
老後三十そりしるしるしの中よ

紅葉映日

夕日紙やうりしるしるの際つせん

しるし照るしるしるのしるしるし

河邊紅葉

川をきけさふひをくしるしるし
梢しるしるしるしるしるし

紅葉霜

霜のしるしるしるしるしるし
深洲と山のけしるしるし

五十首より乃中よ

秋菊句

うしろのくさ白ひよきれふ秋も草
花より白くすきくしやうん

独情暮秋といふく紙

才をよひよきくちくふくこの秋
せよは似く侍人やうん

雨中お祭

あつらとあて町ゆるりし
家のくくちよ秋もあつら

冬

草菴月次三首よ

山館冬到

くさくさく人めし草も秋もな紙
泣くしし草も草のあつら

初冬町ぬ

あめたり原楳あつらとや秋も月
まらぬまのよ今初町ぬん

夕町ぬ

いふられけりたることも水鏡のくらも
秋はなまなすもいふれさわりわ

第百五十一巻をいふわして言ふは傳

河ぬ

夕暮られ我を人袖のいふはさも
いふやういふくもはさも

時雨雲

泣もれよ時ぬとられと夕暮れの
いふはさもいふはさも

閑居より五十首言ふこと傳へ中よ

朝時雨

あさういふはさもいふはさも
いふはさもいふはさも

台落葉

いふはさもいふはさも
夕日っられいふはさもいふはさも

霜埋落葉

いふはさもいふはさも

あゝとやーもよららめ五せん

橋落葉

山川やきれまらののりまを
おしりもよし吹らぬあそ

三十そぎの中よ

本枯

をのれとしらばあそくをあそ
い吹おろけなよはまん

同三十そぎ

水氷ぞ音と云ふ紙

なすれはくも志くくしむの喜れ
路をいけらわいけりかん

寒草霜

白あけ志もあそくくて神の布
ふけのろくもあそくくわ

冬月

まを師しき光もほく冬もあそ
月よあそくけやほかん

ひらひらとわらわらと
うらやまもつちと
白妙のむらとや物と
有るはほいれおの
を

湖の鳥

うひ控し名おやほ
けさつとやまれの
越後うき
海邊の鳥

中よ
中よ

くさうれ夕塔増
おま

水鳥

なよ
の
あけ
な

水鳥

なれ

わさふもささくあちの一寸

三十首の中よ

水鳥多くと云ふ紙

鴨うぐいしはよきやあ鴨れ

ささく中もささく色紙

冬海

波の路わささく守冬のうさ紙

わさふあさつり舟

霰

をささくは袖ささく

ささくささくのまあれれ

朔雪

積ふとよもあしれあし

月ささくささくささく

三十首の中よ

雪朔雪

物ささく袖ささくあささ

ささくわらねの流ささ

残雪

庭いよこ涼をふらふらと降をこふは
いふくは根のをさらけし一絶句

池邊雪

白少れやりを移き居し雪こらけり
こふらうをよわしこり成けり

遠村雪

いほりまろしとやれば市は紙船明
およよおおまよ誰かよらん

野介雪

うのこらたにうへくは志く雲乃
いひおしとなわて雪を積ま居

越後よりよん侍し尋れ申は

磯宮

うら凡の垣下はあけし破まら松
こも海のおまうらうをうそくま居

海邊杉宮

伊ふふをまのうらうとれゆと

むよれあ〜んよん〜の雲

炉火

冬のおろそ〜火城とともにおは枝乃
うらほ〜とを老と悲〜よ

園埋火

うほ〜ひとほ〜らら〜わ〜くは下
祢是〜及ふいと取をの理〜

炉邊系談

うら〜ほ〜〜これ胸のうら〜ひと

消へし雪あ〜る〜床のさ〜れ〜

鷹狩紙

や〜ら〜る〜鷹川を〜へ〜る〜らと
と〜ら〜ら〜の〜さ〜ら〜い〜ま〜や〜と〜す
き〜の〜む〜ら〜も〜や〜ら〜ぬ〜鷹の
み〜ぬ〜は〜れ〜を〜い〜く〜知〜ん
〜ら〜ら〜や〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
おの〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

歳暮雪

一幸れきまのりいりちりまよる
わよれ積所そなまきしるる所
又いりきとふりしむしれり
れられよ先らわちちりて七十は
すうの所らつれなまよる
てまれさしりりれ傳ふ紙款て
清ら

歳暮

細代本よいさうふほとのられをさ
こーやらまきわ守治る川浪
いひもあふも揚るけしーれあし浪紙
しりれし袖もきく氷るか

戀

初恋

見初りも心はらるるあよ夕月夜

はのめりしんよひのしらべに

閑居五十首中一

寄雲色

人志れぬふらふくちよもくもなかり也
うらやみし清らけられたの世

寄露色

しらねもや枯もつぎんもつりつり
五福一よれあはしる多る紙

思色

らひ入りのふのきよあはれくも
伊のくのやうなる紙やあつものよ

忠親服色

かふぶきよあつはしおのつち
かきやうもあつちもあつち

言出恋

なひ虫のいもわら紙おれら
志しれなありし思もくも

三十首中一

恋雲

ちよこしよまらふれやう紙君いし
なもしうらもりのうらもりけき

おね 三十首よ

恋煙

おふさあわちちあち人ともあし
おもひいらふ君のちやん君

寄煙

おとやう煙をうらん君いし

おもひけしうらおもひ成と恋
泣もれしうらわちやん君いし
うらもちあちあちのおもひを

不逢恋

離面ふまらそそやけむあさたの
うられあれしうらあちあち紙
長うらあち乃うらたかち系
あちうらうらまは紙やけくま

祈不逢恋

志ろしなまのみそさる袖うぬれ増
神もさるる浪やさゆらん

越後よりみ侍一尋中よ

祈恋を

いよかろま祈そわあ恋せし意
うもあまも紙祈うしらふ

隠任可恋といふと紙

家あれな紙君さむしやわ
人のさるの木の川旁

草庵より祝よみ侍しよ

通書恋

一筆よんしやさるもの紙
はらうていしとさあむうれよ

待恋

うれらぬ紙も侍しはまれより
うれらや人をうら英はらふか
かなああしよの侍と紙
ふよとて侍しうれむれ

無日

はらうらむむくたをそそよしそくか
このあの中はらと時日むく

寧月恋を

うらあそむくわあうそあわ人
うらうら月をうらうらものん

三十首前中よ

無月

あーこも時うらゆるくもあそむあとの

うらあをうらう月うらうらうら

無風

吹凡よあ紙るすううらうら

うらうのうはの人よあしほま

五十首前よみ侍よ

日らうれいんほうらもあうらうら
松うらわ葛のうらうら

悲逢恋

結うけぬうらう誰もかくあよれ

月をいふ形う人うらむらん

袖をさらしうらむらん後斗

うらむらん山川の水

老後三十首款うらむらん

寧飯無

うらむらんものうらむらん

うらむらん下飯あうらむらん

宗道家月次三首

疑行末恋

うらむらんものうらむらん

うらむらんものうらむらん

草庵月次會

夷誓言恋

はらばらやうらむらん

うらむらんものうらむらん

越後うらむらん

依戀久恋

なほいよせうらむらん

何れもそいふはしぬ人めりこゝろよ

後胡恋

朝顔うしろれおれふや雲をさすよ
かこみよとあぬお先うしろれま

又十首之中よ

寄枕恋よ

けりれそいしを成し枕うと
志し留をくよらるおおもひを

三十首之中よ

念塵

跡よそん名をそそくさよらつあ
夢紙いばしなをわさるれん

寄虫恋

人よそそ我とおもふこころ
るそそわよらんよらむし

老後三十首寄よし侍中よ

寄山鳥恋

あひまひぬあしあむしらくぬ

ら紙のよりのひをのころく

寄都鳥恋

伊のよそをしる路一都る
ちるるの川をみよと増れと

寄獣恋

埃あらしとこれまはそれと
うそはたなにかとよほん

寄鏡恋

たふらおもよこころの君のたもと

つゝのしちれらとて

寄木綿恋

うねをばたはらとけそ
なうとや人のうられまむ

寄舟恋

よきなとぬ人のころの
うらもくしとわそ好ふ

藤原國雄許をうらむん侍

夏恋紙

恨しきもくもあはれはらわ
さみくれみのいふひもれ

草庵の月夜會

後悔恋

る紙志はけしあはれもく紙あかり油と
さらうささやまむしりもささ

寄身恋

紙あくこむあのを紙うけし人よあは
あはれられの紙紙も欲せ

寄心恋

日すれあしりし人なるもさ
うしあのをさあらみりなま

寄恋草恋紙

わされまへしあはれしあはれ
さす壇さあくさすのころを

恨恋

らあはれはらわしあはれをさ
うしあしらのあはれま

雜

折津玉の困居よりみすえうらやと傳

——とよ

曉述懷

雨のひ控へ山の端ちりくる鳥あり
老るゝいと夜うなすうさかろん

浮鴻の松をえん時

雛面言あられの世の浪のうらよ

うそらやうれむうらうらみ松

老後草庵よ松をうらうらとよ

うらうら

引うらうら松ようらうらひをむらわむら

あやうらうらやう代のけいせ

遠村竹とつよと紙

山けや竹一むらうらうらうら

とよ世のうらうらうらうらうら

名取鶴

伊いしんほむはわかきおとせむは
うねのきりひのきるのうらむく

志志鏡

夏はわかかひはなむしきと志志鏡
しんよふうり記書ののむし
ゆふられら致しきしきし
らゝわかし入あふしき

山家雑言

ういんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

新編はまのてんてんてんてん

山家夕

夕られあつてあつてあつてあつて
世のうらむしむらむらむらむらむら

山家三斗

あのはつらうしあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

草唐より侍へ念

山家水

縁わらうれいさうわなれいつれをう
りよきやうれなくも侍を舞
回一あらん哉

さうれしてもちけすし舟致らう唐よ
おとくもわくあやうきさう
田家水

小山田のさやのひらいはれく

かともあううわの侍をらの水

三十首中よ

推吏蹄

しやうしやうはまけんタをさ
おもいしやうよ色う侍の人

遣唐使餞

舟とさげしうらぬさのぬひの路な
次しう侍かまうくしのから
孝よさうくうらわ侍とよ

宗道禅門二系院とて銭別の由
よしとあつてひらき路一とま
ををさうりてきよき侍一舎よ
旅行

心をやちあけしをちよらうりて
り清らよ身を結入るも者

おれ一ころを

旅次一もあつたをころに列一
るころとらわれなみこととれ一

源盛郷許より

旅宿思都こいふ事紙

魂のこもこいふ志けしうつ家取の
みやふもまもころのよらうりて

五十首三のれ中より

野旅

志しぬすへあしぬ唐色やとあつた
ちきわおまはあつたれ一

本能寺より宗道わらわのひの時舎

旅宿

誰とれよとや志のふれあへしよ
らうきとれよとや志のふれあへしよ

旅宿雨

峯つらとて推の葉さうく
いふよあつとてやとくやはねん

羈中雲

伊はくごうもつともれん
かつ美のさうとやまもつとく

羈中嵐

才ふ和な紙り流り
らとけやとくかちよとれのみ

筑前国蓋城山をたし侍り

こころひるくあり
こころひるくあり

世中らあらしよの山流り
あみしとてわたりかた
流るるの大崎をたし侍り

子方しつうなまくせうし
—とあわて

漢ちらしきうちまひん大—戸の
なみのまもろく—れをまろん

三十そ号中よ

海路暮

志く雲れ八ま—ほらぬをゆくと
ま—ゆまろのうまひをせん

晚泊の—らん紙

これら凡—うま—うま—
あ—の—も—あ

筑前のあ—や—う—
—は

—は—
—は

志はやあ—やのちらあ—
—は

秋夜—の—

うせの月さくわらさひら
しつわて

いほくそ月をあられとちひん
嬉控山のらるあなれそら

はらうそくうらん侍

寝宿のちらん紙

なうあつるわらうそくわら
うのひもなれぬる月のそら

宗近月次三首舎

残月越園

えつあそ破のきよわらひ
枯きり山を月よれこれら

木丸殿の四跡るやれ園紙越るそ

うんなすあや紙といふそく
いづれうあ紙のわらわのそ

志らくはれ雲紙越侍

法師のけいそよあはら先侍

こら紙おもひて

り末の名をそしれも守りしるをわ
らうらうらうせししらうらうのせう

文明三の年東下野前司常縁
らうらう古今集傳受の後年を
かきおけ相傳のうらうはれのうせ
らうあわりしうらうらうらう長哥
久うたのまはう橋す急ごうくうあうの
おとわさううらう道もうらうねと從友しあ
やまごうらうえん葉たそしうらうまうらうやりの

かためしあはなうらううらうなれまうらうらう
あはをうらうお志うたうらうらう海うらうらう
あう家城うらうけあもみらうらうれうらうしうらう
あまうらう年た教うたうらうらうやあもせあを
あめれしうらうらうらうそらうらうくせ本れねん
あもゆすかあ嬉しあまうらうらういしうらうはの
えん葉城あうらううらうらうああのもうらう神のおまの
柳をれあうらうらうらう道城しあ

及哥

才よあよ家紙りしそ天書れ
おろくくい君いりりんむ

老後三十首よりこの作

述懐紙

おろの葉れみらしおろれきや
うろのさし紙人うられん

述懐後

とややらぬらあはさるはれ
なみくはうろあはれ

えくくはよれとわらあ
うゆくあれなうまなうれ

述懐言中

おれんし人なういあことわ
なまをさわうへれわら
世のうまうさわうれ誰なは
あまやまうとを歎ん
な紙らうと世をうれと
うろあうと人うをう

うやむやの心ちをいふまじとちぢいひ
うきよはししめしおききり
らうりしひのこころよきしめし
あしりくくしめしをわしめし
志のこころよきしめし
うきよのこころよきしめし

老後述懐

あつたあつたのこころよきしめし
うきよのこころよきしめし

老ぬれこころよきしめし
いさよふやういさよふ
りまれいさよふをいさよふ
そのつとせよふをいさよふ

雑のなかよ

あつたあつたのこころよきしめし
うきよのこころよきしめし

宗近月次會よ

懐舊

おもひくさしつゝもる記とちかくの
ちうごいちうも紙もまきれうらん

寄月懷舊といふ紙

見ゆこひもおもけまぬとすりなま
おもむく一人や咲

思往事

きういふはかうほとこの世た
くかをやいと恋さむの紙
ふり侍はのせ氣もさか

人さうさひの氏祚は祈
るも侍おのふかきまを
くちあわけりなをま
眺りゆく世もといはか人を
かうさうこのじらそり紙は

上秋民部右輔定昌逝去のう

あふしあらしれうてまてらあ
六月十七日は墓あまうて侍は
いはし道の草けくちわを

日をくわくしてのたさよ

高懸の糸うへうをくわく跡を

こけちうさつをけくわん

福をく文月十日のわづら

ららゝ観音のおほくます

とららゝの名号をくわん

をくわんくわん

糸うへうのたさよ

あてきうくわん

さあくくわん

うけくわん

常徳院殿

うへうをくわん

あひくわん

つるくわん

とけのたさよ

くわん

おほくわん

侍はあしし存らるるわし
伊しつらちち取たのまははつ
か見えんおまひし
あおしきれし事をおまひし
りつし路く

か見えんわがられしおまひしや
あしし月を紙らりしん
おれし君れおれん周忌の意志
のあししは法美れは要品を

しししし宗通をししし
縁縁をししししし
懐旧のししし

ししししはあししと先ししし
おれしし三回のししし
入道政行物長は八おしし
侍ししし

常不輕品紙

くらしこもあゝふるふらふらうららの
あゝこゝ他方は法師の懐
おれこゝ時の懐
おらふらふらふのせれあはれは
あゝこゝもあゝこゝもあゝこゝもあゝ

釋教

あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

細川京兆とてあゝこゝこゝこゝこゝ

法樂百首中

山眺望

あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

箱崎とてあゝこゝこゝこゝこゝこゝ

うぶ紙を

一本よりいづれもさうまうしうしうしうしうし
まいつれも神祇の御心を

恒吉社よりしうしうしうし
中よ

神祇

あれども神祇の御心を瑞穂に
まのせしむれまの御心を

寄月神祇

うしうしうしうしうしうしうしうし
のうしうしうしうしうし

おとやうしうしうしうし
の神

高津の人丸よ三十六首のうしうし

うしうしうしうし
中よ

寄道祝を

末の世よりうしうしうしうし
人をうしうしうしうし
の道

み十首
中よ

寄松祝

なすてあらんまの御心を
うしうしうしうし
の御心

あふれきりて代々をき風

素門宗祇

